



財政困難のいま、 お手本となる一冊。



日本銀行を創った男
小説・松方正義
渡辺房男/文藝春秋/1680円

山内昌之

明治大学特任教授・国際関係史

経常歳入の六二八六万円は、現状の紙幣価値が正貨一〇〇円につき一七〇円なので、三七〇〇万円にすぎないことになる。つまり各省庁の予算実額が著しく目減りしているのだ。凡庸な政治家が理解できないのは、名目上多額の予算を各省に分配したとしても、実効性のある予算とはならない点にある。

では、これを解決するにはどうしたらよいのか。まず名目と実質の金額差である三〇〇〇万の正貨銀を三年間で備蓄しながら、各省の経費の節減を図ることが必要になる。松方は、この理屈を無視した政治家や官僚が平気で予算増を求めてくることに腹を立てた。その一方で抜本的な財政再建に乗り出したのである。

そのためには、まず物価騰貴を食い止める方策が必要になる。最善の策と考えられたのは日本銀行の創設にほかならない。日本で唯一の紙幣発行権をもつ銀行の役割は、無秩序に各地の国立銀行が発券した紙幣の回収と、冗費の節減をはかることで国家財政の健全化をはかる点にあった。本書は、西欧にも前例のないほど困難な財政金融政策に挑戦した使命感あふれる政治家の姿をリアルに描いている。国民から国会議員にいたるまで各層が読むにふさわしい本格派の小説である。●

いま日本の政治家がいちばん学ぶべき先人は、松方正義ではないだろうか。

一般に松方といえば、デフレ政策と緊縮財政の元祖として知られるが、渡辺房男氏の新作ではもっと骨太の愛国者として財政健全化に努めた輪郭と歴史が描かれる。

まず、この本を読んで、明治の政治家も現代の国会議員たちと同じように財政に暗かったことに驚かされる。このあたりの事情が数字に裏付けられた財政学の分かりやすい説明を通して語られる点が

本書の魅力である。

たとえば、明治十五年の歳出額は経常費と臨時費合わせて七三五〇万円であり、前年より二〇〇万円も増加していた。二年前には六一三〇万円であったので、予算規模の膨張は驚くべきであり、これこそ紙幣による購買力の低下をもたらし続けていたのだ。実質的な紙幣価値は、正貨の銀と同じではない。明治十五年には銀一〇〇〇円に対して、紙幣価値は一五七一円だったのである。ところが、国立銀行条例が改正された明治九年には、

平均九八九円であり、むしろ紙幣の価値のほうが高かったのである。しかし、全国国立銀行が不換紙幣をほぼ自由に出す一方だったので、銀に対する紙幣価値は下がる一方だった。西南戦争が生じた明治十年には一〇三三円となり、十五年には一五七一円になったのである。

いまもむかしも普通の政治家には、価値の下落した紙幣をもとに予算を編成しても、それは「実効のある金」にもとづく予算にはならないという理屈が呑み込めないらしい。明治十四年に例をとると